

調査法は大切，でもしよせんは道具

今野浩一郎

アナログ世代であるからか，論文にしても専門書にしても，筆者の思いが伝わる「ときめく」作品が好きで，調査法や分析法の厳密さや緻密さを追う作品に「ときめく」ことはない。

もちろん実証研究に取り組む研究者にとって調査法は重要な武器であり，それを習得するために多くの時間を費やす。しかし，しよせん，それは「何かを明らかにしたい」という目的を実現するための道具にすぎない。「手にしている道具が金槌だけだとすると，あらゆるものを釘のように扱いたくなるはずだ」。モチベーション論で有名なあのマズローが発した，最近知った，この警句が全てを語っているように思う。

多くの場合，何らかの社会問題を解決するための知見を得たいというのが研究の出発点になると思うが，その解決に行きつくまでには考えなければならぬ問題は山ほどある。そこで，そのなかから「何を問題にするのか」を決め，その「問題をどのような観点から読み解くのか」の研究の「基本戦略」を創らねばならない。この段階でいかに考え抜くかが勝負であり，ここでセンスを発揮することが「ときめく」作品を創るうえで決定的である。いかに高度な調査法を用いようが，また，いかに調査法を操る高度なスキルをもっていようが，「基本戦略」を誤れば「ときめく」成果は望めない。

関連の論文等を読むことはそのための作業であるが，それとともに重要なことは現場の知恵から学ぶことである。研究者が扱うデータの多くは，「現場の行為」のある側面を定量的あるいは定性的に表現したものであるが，「現場の行為」は現場で活動する人たちの営みの「結果」でしかない。「結果」の背景には，何を問題とすべきかを決め，それを解決するための手立てを幾つも考え，そのなかから最適と思われるものを選択したう

で実行し，成功したり失敗したりするというプロセスがあり，そのなかで多くの「知恵」が作られ蓄積されている。「何を問題にするのか」「問題をどのような観点から読み解くのか」を考えるうえで，この現場の「知恵」を観察する，それも冷めた目で観察することがとても役に立つ。研究者によって得意とする調査法は異なると思うが，どの調査法をとろうとも大切なことであり，これも重要な調査法の一つかもしれない。

「基本戦略」が決まれば，あとは情報を収集し分析する研究の「作業」に取り組むことになる。調査法は「作業」に使われる道具の一つであるので，どの調査法が優れているかは事前に決まるものではなく，「基本戦略」に合わせて選択されるべきということになる。その程度のことを扱うのに，そんな大げさな道具を振り回さなくてもと思うことが少なからずあるので，マズローの警句が重要なかもしれない。

しかし，研究者にとって，調査法は使いこなさなければならない道具である。まずは得意な調査法をもち，磨きをかけることが重要である。ただ，それだけでは「基本戦略」に合わせて調査法を選択するという柔軟な対応ができないので，「それ以外の調査法」にもそれなりに対応できることが大切である。といっても，得意な調査法と同じように巧みに使いこなすことはとうてい無理なので，「誰に聞けば分かるのか」「誰に助けを求めればいいのか」という使える状況を作っておく。喜んで助けてくれる仲間を作っておくことも重要な調査法である。

「何を問題にするのか」「問題をどのような観点から読み解くのか」にこだわり，調査法に使われることなく，調査法を使いこなす研究者でありたいものである。

(いまの・こういちろう 学習院大学経済学部教授)